

東方青龍

とうほうせいりゅう(Green Dragon)

伊勢崎市立あずま中学校

学校通信 NO.122

平成29年3月22日(水)

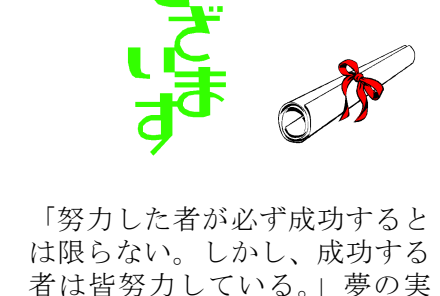


卒業式 絆を胸に明るい未来へ旅立で!

3月13日(月)に第70回卒業証書授与式を挙行了しました。厳かでしかもすばらしい歌声が響き渡る卒業式を終え、290名の3年生が、仲間との絆と希望を胸にあずま中学校を巣立っていきました。



在校生代表の送辞



「努力した者が必ず成功するとは限らない。しかし、成功する者は皆努力している。」夢の実現に向けて頑張ってください。



卒業生代表の答辞



「生きる」ということ

伊勢崎市立あずま中学校 3年 山本 真里那

「生きる」ということは、毎日を普通に生きている私にとってよくわからなかった。学校に行ったり、勉強したりして、平和に過ごすことが「生きる」ことだと思っていた。だが、この本を読んでから、私の考えは一変した。

この本に登場する女の子「山内桜良」は、膵臓の病気のために死を目の前にした生活をしてきた。彼女の行動や考え方、性格に私は勇気をもらった。同時に、彼女への感謝の気持ちでいっぱいになった。また、彼女の病気について偶然知った男の子が主人公として描かれているが、私の考え方はどちらかかという彼に似ていた。死を目の前にしていないので、普通の毎日を過ごしている彼には共感できた。だから私は、考え方が反対な彼女に強く憧れたのだろう。

病気だった彼女のことを、私は桜の花のように思った。名前が「桜良」ということもあったが、それだけではなく生き方が桜の花のようだった。満開に咲いた後、すぐに散らぬように懸命に咲く綺麗な姿からそう感じた。人を愛し、人に愛されていた彼女に、私はすっかり魅了された。

彼女に対して、私自身はどうだろうと考えた。彼女のように日常を大切にしているだろうか。彼女のように人との関わりに愛を持っていただけるか。いつか私も、突然死に触れてしまうのではないだろうか。そんなことを考えた。けれども、あまり実感がわかなかった私は、一度「死ぬ」という設定で深く考えてみた。

すると、私の日常はただ同じ日々を過ごしているだけだったことに気付いた。人との関わりは、互いが傷つかないように深く関わっていなかった。死について考えたら怖くなった。大切な人たちがいる中で、その人たちとお別れになると思うと、不安で怖くてたまらなくなった。そう考えた後、私は彼女が思っていたこと、感じていたこと、見ていた世界がわかる気がした。

もう一つ印象に残っていることがある。それは最後に主人公が彼女から気付かされた、「道を選んだ」という考え方だ。一般的に、今までの人生で起こった出来事を「運命」だと考えるのではないだろうか。例えば、人と出会ったことを、そういう「運命」だったと受け止めることだ。だが、それを彼女は「運命」ではなく自分で「選んだ」と言うのだ。遊ぶことを選んだり、勉強することを選んだり、他にもたくさん自分のことを彼女は自分の意思で考え、行動して

いるのかと思った。

このことを、私の今の状況に置き換えてみた。私は中学三年生なので、高校受験のことで色々悩んでいる。高い目標を目指したいという気持ちはあるが、自分の学力では無理だろうと諦めてしまっていた。だが、それはそういう運命なのではなく、自分で自分の可能性の選択肢を捨てているのではないかと考えた。本当はできるはずなのに、楽な考え方をしていただけなのではないかと感じた。今の自分では見えていないだけで、真剣に考えて頑張ればその選択肢は見えてきて、自分の意思で選択できるのではないかと思えた。何に対しても選択は無限なのだと思付いた。

「君の膵臓をたべたい」というタイトルを初めて目にしたとき、すごく不思議な本だなと思っていた。でも、読み終えた今の私ならわかる。このタイトルにはたくさんの思いが詰まっていることを。まだ生きていたいと願う彼女の思い。彼女のようになりたいと願う主人公の思い。他の誰でもない「君の膵臓」を食べるからこそ、自分の持っていない輝きが生まれるのかもしれない。

もう一度考えてみると、もしかしたら突然私の前に「死」が訪れてしまうかもしれないし、そうなったら怖いと感じてしまう。しかし、怖いと感じなくなるくらいに今の日常を大切に、大切な人たちをもっと深く愛せるようにしたい。そして悔いのない選択を心掛けたい。

私はこの本を通して、「生きる」ということの素晴らしさを実感した。これからの人生で、時には彼女のように一歩前進して挑戦したり、時には主人公のように一歩引いて冷静になってみようと思う。

人は、笑ったり、泣いたり、怒ったり、喜んだりする。人を愛したり、人に感謝したり、人を守ろうとしたりする。自分の気持ちに素直になって、一瞬一瞬を大切にすること、それが「生きる」ということなのではないだろうか。だから、生きている限り「生きる」ということを大切にしなければならないのだ。

書名	君の膵臓をたべたい
出版社名	双葉社
著者名	住野よる